

# 青年期における死の不安と「死」・「生」・「自己」のイメージ

——DAS と SD 法を用いて——

松下姫歌・尾方綾

Death anxiety and images of “Death”, “Life” and “Self” in youth:

Using Death Anxiety Scale and Semantic Differential Scale

Himeka Matsushita and Aya Ogata

本研究では、青年期を対象に、死の不安と「死」・「生」・「自己」のイメージとの関係を検討した。死の不安を測定する尺度として、Templer (1970) の Death Anxiety Scale (DAS) を用いた。イメージを測定するための尺度として、独自に作成した単独 SD 法を用いた。その結果、青年期における全体的傾向として、「死」はネガティブなイメージであり、「生」・「自己」はポジティブな、「死」とは異なるものと捉えていることが明らかとなった。但し、DAS で測定される死の不安の高さによって、「死」・「生」・「自己」のイメージは異なり、死の不安の高い人は、「自己」が「生きる」ことに充足感や成長可能性を感じ、「死」はその自己の生に有限性を与え、喪失させるネガティブなものとしてイメージされており、それゆえの死の不安の高さであることが理解された。一方、死の不安が低い場合、「死」・「生」・「自己」について距離を置いたイメージで捉えていることが、不安の低さと結びついていると考えられた。

キーワード：死、死の不安、DAS、イメージ、SD 法

## 問題

### 1 青年期と死

青年期は「他ならぬ自己」(木村, 1982)を追い求める時期である。そこには、自分が自分であって、他者ではない、ということが、心的にどのようにして成立しうるのか、という問いが含まれている。物理的・身体的に別々のものとして存在しているという認識と、「自分が自分である」という自己存在感を実感することは、別の問題なのである。そこには、「本当の自分」はどこか未知の領域にあって、今はまだ獲得できていない、今の自分は、いわば仮の自分であるかもしれないと見る存在構造がある。つまり、これまでの自分を本当の自分とするという点において、疑い、否定する、という契機が含まれている。言い方を換えれば、本当の自分を見出すには、これまでの自分はもう自分ではな

い、と否定することが必要になるのであり、いわば、心的な自分殺しが要請されると考えられる。

それは、自分を見つめる目の変化である。これまでの自分が環界との関わりの中で学んできた、当たり前前が当たり前でなくなり、苦悩の中でそれらを自分なりに捉え直し、主体的に位置づけ直す作業がはじまる。その作業を通じて、自分が感じていることの自己性と他者性、自分を動かす力の自己超越性にまつわる洞察が深まり、自分と自分を生みだしている力との関係を見出すことになるのだと考えられる。

こうしたことが、古くから多くの研究者によって、「第二の誕生」、「心理的離乳」、「第二の分離個体化」、「アイデンティティ」といった概念で捉えられてきた、いわば自己の生まれ変わりというべき、自己の変容をとまなう自己更新の側面であろうと考えられる。つまり、あらためて自己を主体的な文脈のもとに心的存在として更新するということには、自己の否定という、心的な意味での自己の死と再生への動きが含まれていると考えられる。

しかし、冒頭に述べた通り、自分が他ならぬ自分であるということが、知的な認識に留まるのではなく、心的な自己存在感として実感されるには、心的な文脈において、リアリティをもって、自己が否定され、死ぬということが必要になってくる。自己否定・存在否定の体験は、心的存在としては、死の体験に値する。その体験のリアリティが、いわゆる日常的な意味での現実世界における、物理的な死という手段を通して求められてしまう場合がありうる。

内閣府の平成19年度自殺対策白書によれば、かつて昭和20年代から30年代にかけて、青少年の自殺者数が急増したが、以降は減少し、近年は全体の10%台の水準で横這いに推移している。しかし、青年期の全死因に占める自殺の割合は男女ともに高く、特に、青年期後期にあたる20代においては4割を超える。このことは、依然として、青年期の心と死との親和性を示すものと考えられ、青年期特有の自己探求のあり方との親和性についての傍証とも捉えうる。その意味で、「自殺は、せつかな変容の衝動である」(Hillman,1964)。

## 2 現代社会と死

山中(2006)は、「誕生」や「死」のようなテーマが病院という清潔な環境下で、すべてガラスの向こう側カーテンの向こう側の清潔な世界へと切り離されてしまい、死の問題はリセット可能だという、バーチャルな世界と混同されてしまうようなテーマとなっているとしている。

河合(1994)は、人間の生について考えるためには死について考えねばならないし、死について考えることは生についての考えを引き起こす。この両者は分かち難く結びついていて、一方だけを忘れて、一方だけを考えはじめると不毛になることが多いとしている。

「死」について考えるということは「生」について考えることにつながるということが言える。反対に、「死」について考えること自体を拒否し、日常から隔離してしまっている、生きることについて深く考えることもできないといえるのではないだろうか。しかし現代の我々の生活を考えると、「死」は日常から切り離され、「死」について考えること自体を拒んでいるようである。

こうした、心的な意味での「死」と「生」についての知恵を失いつつある現代社会においては、青年は、心的な意味での自己の生まれ変わりをいかにして成し遂げていけるのであろうか。

### 3 死の不安

死についての知は、生についての知と不可分である。しかし、死についての知はどのようにして得られるのであろうか。

まず、死は不可知であり、死が我が身に訪れることによってしか体験できない、という考え方がある。少なくとも、死は、肉体的に滅び、現世に生きることが叶わなくなることは明白な事実である。一方で、肉体的な死が、精神の死と同義とみなせるかどうかについては、古くから謎とされてきた。こうした、死の概念を、心的にどう受けとめ、自らの世界観に位置づけるかということは、古来、あらゆる宗教哲学において、あるいは素朴な人々の心のいとなみとして、取り組まれてきたテーマであった。そして、そのようにしてつちかわれた死生観は、成長や挫折といった、心の生き死にまつわる問題についての知恵としても用いられてきた。

逆に言えば、死について知ることや、死を自分の中に位置づけることは、それほどに難しいものであるがために、いかに死ぬかが、宗教哲学において、人生の究極の目標とされてきたのであり、また、人生において、心的な自己存在の死に瀕するような悩みの体験を、どう受けとめるかもまた、困難な道のりであった。

この点について、Freud(1926 井村訳, 1970)は、不安は、漠然とした対象のない恐れ感情としており、心的危機の予知としての信号不安と、内的安定のための防衛機制について論じている。Freud (1926 井村訳, 1970) は、不安は、特定の経路による緊張解除の作用をとまなう特殊な不快状態であるとしている。彼は不安を、しかるべき理由があり、怖れられる対象が明白であり、それに対して対決するにせよ逃避するにせよ、我々がしかるべき対処ができる現実不安(笠原, 1983)と、分からない危険に対する神経症的不安に区別している(Freud, 1926 井村訳, 1970)。

ここで述べられているのは、いわば、心的な水準での死とその不安であると言える。現実的な死に対する不安の場合、ある面では、不安の対象は明白であり、その意味で現実不安であるが、死そのものは免れえないという点で、他の現実不安とは一線を画す。物理的に自己存在を喪失するという点で、否応無しに、自己存在や世界についての根源的な課題をつきつけられ乗り越えることが要請され、大きな成長可能性も秘めると同時に、それは、これまでの理解を超えての大きな自己更新を迫られるという意味で、心的水準での死の不安の問題にリンクし、神経症的不安をも惹起しうると考えられる。この点に関し、死が不可知で体験することができないために、意識の上では病気や災害に対する不安に置き換えられるとする考えや、死を恐れるということは、死そのものを恐れるというよりも、死によって喪失してしまうことに対する恐れであるという考えがある(Levitt, 1966 西川訳, 1969)。つけ加えるならば、死の不安は、現実の死と心的な死を自分の中でどう位置づけてよいかという大きな不可知性に対する恐れでもあると考えられる。

したがって、死についての知、すなわち、心が死を——それが現実の死であれ、心的水準の死であれ——どのように受けとめ位置づけるか、という点の第一歩は、死の不安と言える。

### 4 死の不安尺度

死の不安をとらえるアプローチとして、まず、心理量としてとらえるものがある。

死の不安を測定する尺度の代表的なものとして、Templer (1970) の Death Anxiety Scale (DAS) があげられる。これは、15 項目からなる自記式の質問紙で、「はい」「いいえ」の2件法で回答し、0 点～15 点の得点が得られ、高得点ほど死の不安が高いとされる。DAS は 40 項目中、表面的妥当性の評定により採択された 31 項目を 3 群に実施し、群別に点双列相関係数が求められ、3 群中 2 群において  $P < .10$  で有意の相関が得られたものを最終的に採択したものである。MAS, Welsh Anxiety Scale, Welsh Anxiety Index といった不安検査との相関は、不安検査相互間の相関より低く、DAS で測定しうる死の不安は、一般的不安とは質が異なると主張されている。DAS が測定しうるものについて、Collett らの「自分の死 (ぬこと)」との相関や、Dickstein の「死に対する否定的評価」との関連についての報告から、「自分の死 (ぬこと) についてのもの、しかも死に対する否定的評価」を測定していると推定されている (岡村, 1983)。

DAS によって測定される死の不安については、発達段階や性差、死別体験や宗教等との関連が検討されている。岡村 (1983) の研究では、高齢群の方が DAS 得点が低いこと、青年後期・プレ成人期において一般学生より医学生の方が DAS 得点が低いという結果が示されている。また、金児 (1994) は大学生とその親を対象に、死の不安と宗教行動との関連を調査し、死の不安は、親世代より子世代の方が、男性より女性の方が高いことを示している。また、内発的宗教行動は死の不安の軽減に、外発的宗教行動は死の不安の増大に関係していることを明らかにしている。

ただし、DAS で測定しうる死の不安は、意識水準での不安であり、死の不安に対する無意識的な防衛については知ることができない。つまり、死の不安が大きすぎて防衛機制が働き、表面上の不安は低く測定されるということが生じうることが考えられる。

## 5 死のイメージ

次に、死に不安を感じるか否か、どれくらい感じるかという量的な捉え方ばかりでなく、死をどのように捉えているか、あるいは死のどんな側面をキャッチしているか、という点について、死のイメージを問うというアプローチがあげられる。

### 1) イメージの概念

イメージの概念については様々な立場がある。水島 (1988) は、イメージは感覚・知覚像でありながら、同時に行動の内化として私たちがその中に入り込んでおり、イメージによって、事象を予期し、行動を準備し、統制するというように、命題処理、情報処理に深く関わるものとしている。藤岡 (1983) は、知覚は、現にここに対象があるとき、対象から受ける感覚刺激をまとめ、この知覚をよりどころとして主体はさらにイメージを作るとしている。

また、河合 (1991) は、イメージとは単なる視覚像でなく感情体験が伴うものであるとし、さらに、水島 (1988) は夢をきっかけにしてある人に対する愛情や敵意が喚起されるといったように、イメージが感情に影響を与えることを示唆している。藤岡 (1983) は、イメージは感情が伴わなければ「力」にならないとし、イメージには感情が含まれ、感情はイメージに寄り添っているとしている。

このように、外界知覚に基づくか否かにかかわらず、イメージは、何かを、主体的に、血の通ったものとしてとらえることを推し進める働きであると言える。この点に関し、河合 (1991) は、イ

メージはそれ自身が自律性を持ち、自我のコントロールから独立しているとする。具象化された形で表現され、単純でなく、色々な素材が複合され、独立した意義を持ち、象徴的な意味をもつ。象徴とは、既知のもの代用でなく、ある比較的未知なものの最良の表現であり、それ以上明瞭ないしは適確に言い表すことができないものである (Jung, 1960(1971), 河合, 1967)。

以上のことから、イメージは主体的な関わりや感情と密接に関係し、さらに、意識を超えたところから意識に語りかけるものであると考えられる。この観点から、死の不安についても、不安という感情が生じるところに、実は「死」に対するイメージが伴っていると考えられる。

## 2) 死のイメージに関する研究

「死」のイメージに関して、自由記述法やSD法、KJ法などを用いた研究がなされている。

柏木 (1999) は、医師、看護婦、一般の人を対象に、死のイメージについて調査を行った。その結果、一般の人における死のイメージで最も多い順に、「さびしい」(38.3%)、「こわい」(33.4%)、「くるしい」(10.1%)、「やすらか」(8.9%)、「うつくしい」(1.1%)であったが、65歳以上の高齢者においては、「さびしい」(47.7%)、「やすらか」(16.0%)、「こわい」(13.2%)、「くるしい」(10.8%)、「うつくしい」(3.4%)であり、死は老人より若い人にストレスとなると結論付けている。

丹下 (2002) は、中高生を対象に、「死」の連想語を収集・分類し、わが国における死生観の構造とその発達差について検討するべく調査を行っている。その結果、死の概念の理解が成立した年代であっても「死」を思い浮かべる場合には、客観的な事象としてではなく、様々な意味、価値、態度、信念などを付与した形で想起がなされる可能性が示唆された。また、年齢の上昇に伴い、連想語数の増加だけでなく、連想の領域(カテゴリ数)も広がることが示された。また、「死」の連想語からは、「死」のみに関連するカテゴリだけでなく、「生」に関するカテゴリも見出されている。

石坂 (2003) は、死の意味づけに関し KJ 法を参考に回答を分類した結果、死の否定的意味づけである“ネガティブ”、肯定的意味づけである“ポジティブ”、死に対して肯定・否定の両価的な意味づけを意識している“アンビバレント”を見出している。また、青年期の死に対する態度について、全体としては“ネガティブ”な反応が中心であるが、“ポジティブ”な反応も生じることが示唆されている (丹下, 2002; 藤井, 2003; 石坂, 2003, 2004)。

これらの研究は、全体としては、死はネガティブに捉えられる傾向はあるが、若年から高齢者の幅においても、青年期の範疇においても、年齢の上昇に従い、死をポジティブにとらえる観点や両価的な態度が生じることが示唆される。しかし、これらの研究では、死のイメージを捉える観点が、基本的にネガティブかポジティブか、あるいは両価的かといった、結局は、死を不安なものとして捉えるか、受容するか、といった観点に近いものに留まっている。

死が、自分を揺るがすネガティブなものとして捉えられたり、不安に感じたりするという時、そのようにネガティブに感じられるのは、どのようなイメージとして捉えられているからなのか、という点が重要なのではないだろうか。換言すれば、死を否定し受け容れないという点だけでなく、否定しているけれども、そこに死について「受け取っている」イメージがある、という面こそを捉えていくことが、心的な死の体験を深めていく糸口になると考えられるのである。

この点に関し、死の不安に関する研究や、「死」のイメージに関する研究そのものは多いが、死の

不安と「死」のイメージとの関係を検討する研究は少ない。本研究は、その点について検討しようとするものである。

### 3) 死のイメージの測定法

イメージ測定の有効な方法としてSD法があげられる(渋谷・渋谷, 1991)。これはある概念についてのイメージを、一連の相反する形容詞対の尺度上でどの程度あてはまるかを評定することで洗い出す方法である。SD法は情緒的意味の測定法であり、概念のもつ意味空間は、評価、力量、活動という3つの普遍的な両極性の因子から成るとされるが、日本語の意味構造においては、英語と違って、論理的評価、感性的評価、巨大性、力動性に分離されるとしている(柏木, 1963)。しかし、判断の対象が変われば尺度の因子的意味が変わり、抽出された因子の相対的重要性の順位が変わるとされている(渋谷・渋谷, 1991)。

SD法には、評定尺度項目として相反する形容詞対でなく、単独の形容詞を用いる、単独形容詞SD法がある。これには、両極性の尺度上では中点に評定されていたものの内容をより明確にしうるという利点がある。加えて、どちらの形容詞にも当てはまるという様相を具体的に明らかにすることが可能であり、これにより、一つ概念に対してもつイメージの両価性を測定できることができる(李, 1990)。

青年期における死のイメージは、上述したように、両価的なイメージが生じたり、ネガティブなイメージと平衡してポジティブなイメージも生じうる(丹下, 2002; 藤井, 2003; 石坂, 2003, 2004)。また、死と生に重なりあうイメージカテゴリが見られることも報告されている(丹下, 2002)。

これらの点を踏まえ、本研究では、「死」と「生」および「自己」のイメージを測定し、その方法として単独SD法を用いる。

### 目的

以上の点を踏まえ、本研究では、死との親和性が高く、自立に向けて、これまでの自分を新たに更新して捉えることが内的にも外的にも要請される青年期後期を対象に、死の不安と「死」と「生」および「自己」のイメージとの関係を検討することを目的とする。

### 方法

1) 被調査者 広島大学に通う大学生207名(男性50名、女性152名、不明5名)。平均年齢は、19.6歳( $SD=1.32$ 歳,  $range=18$ 歳-25歳)であった。

2) 手続き 調査時期は2007年7月、8月、10月。次の2つの質問紙による調査をおこなった。①死の不安尺度(DAS)(Templer, 1970)15項目、「はい」「いいえ」の2件法(Table1)。②単独SD法による「死」・「生」・「自己」のイメージを測定する各40項目、5件法。単独SD法の尺度項目については、柏木(1963)、岡村(1983)、李(1990)、渋谷ら(1991)の形容詞対を参考にし、柏木(1963)の4因子論、李(1990)の3つの観点、および、渋谷(1991)、丹下(2002)、Franz(1984氏原訳, 1989)の報告を元に、カテゴリの偏りがないように独自に選定した20対計40個の形容詞を用いた。

Table1

DAS の項目

(F は逆転項目)

項目番号	項目内容
1	死ぬのがとてもこわい (T)
2	死についての考えはめったに心に浮かんでこない (F)
3	人が死について話していてもとくに気にならない (F)
4	手術を受けなければならないと考えることはこわい (T)
5	死ぬことは全然こわくない (F)
6	ガンになることはあまりこわくない (F)
7	死についての考えに悩まされることはまったくくない (F)
8	時間があまりに速くたつので悲しいと思うことがよくある (T)
9	苦痛の多い死に方をするのがこわい (T)
10	死後の生に関する問題がわたしを迷わせる (T)
11	心臓発作をおこさないかととても心配である (T)
12	私はしばしば人生はあまりにも短いと思う (T)
13	人々が第三次世界大戦について話しているのを聞くと、ぞっとする (T)
14	死体を見ることはおそろしい (T)
15	私にとって将来恐れることは何もないと感じている (F)

### 結果と考察

被調査者の属性について、学部ごと集計した結果が以下の通りである (Table2)。回収した 207 名の回答のうち、欠損値を含む 5 名分を除いた 202 名分のデータをもとに以下の分析をおこなった。

Table2

被調査者の属性

	度数	パーセント
教育	138	68.317
生	18	8.911
医	15	7.426
総科	9	4.455
文	7	3.465
理	6	2.970
工	5	2.475
経済	3	1.485
不明	1	0.495
合計	202	100

#### 1) 死の不安尺度 (DAS)

DAS の各回答について、「はい」を 1 点、「いいえ」を 0 点とし、逆転項目 (2, 3, 5, 6, 7, 15) については得点を逆転させ、被調査者ごとに合計得点を算出した。平均値=10.50, 中央値=11.00,  $SD=2.48$  であった。パーセンタイルを算出したところ 25% で 9.00 点、75% で 12.00 点であった。

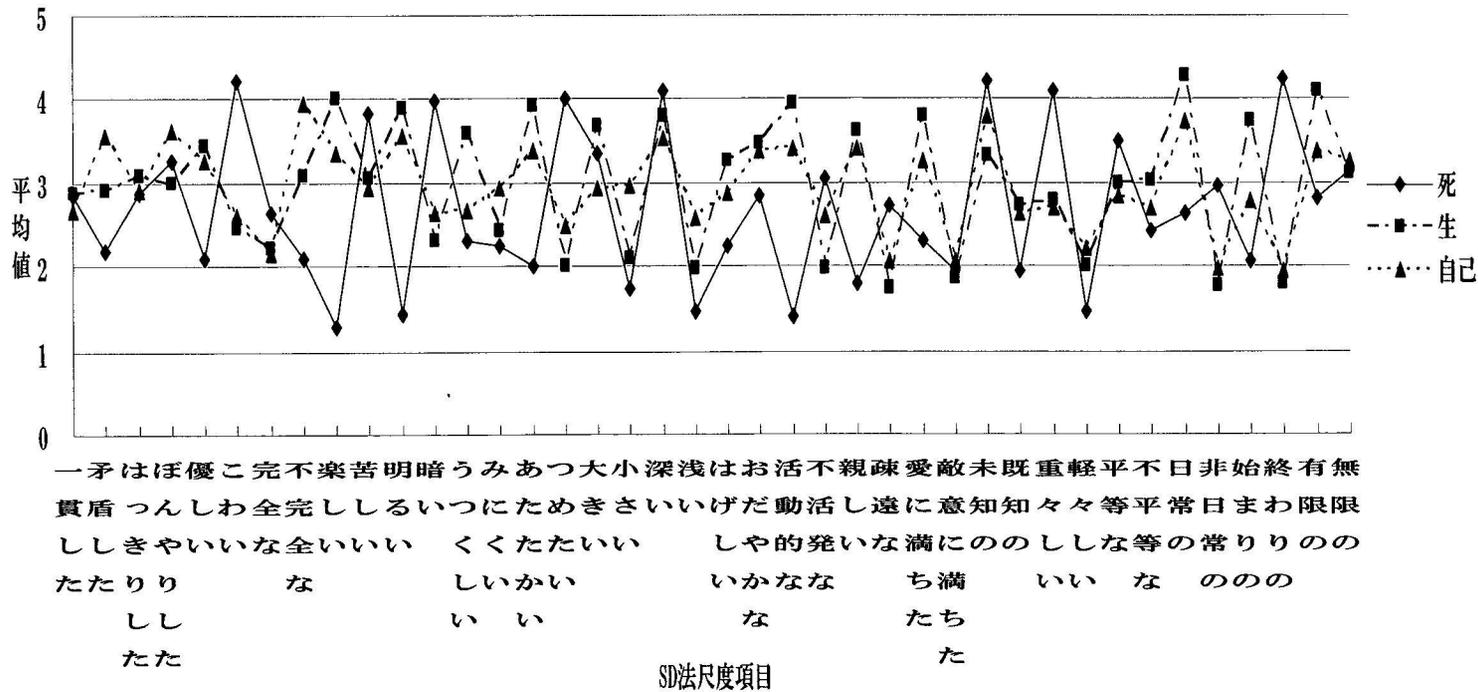


Figure1 被験者全体のプロフィール

## 2) 「死」・「生」・「自己」についての単独形容詞 SD 法におけるイメージ

「死」・「生」・「自己」についての SD 法尺度、各 40 項目について「あてはまる」=1 点～「あてはまらない」=5 点として与えた得点をもとに、「死」・「生」・「自己」のそれぞれに対する、各 SD 尺度項目について、全被調査者 202 名の平均値を算出し、プロフィールを作成した (Figure1)。

Figure1 より、「死」は「生」・「自己」に比べ、「こわい」、「楽しくない」、「明るくない」、「暗い」、「あたたかくない」、「つめたい」、「活動的でない」、「親しくない」、「重々しい」、「日常でない」、「終わりの」といったイメージが見られる。全体的に、「死」にはネガティブなイメージ、「生」や「自己」に対するイメージは比較的近く、ポジティブなイメージが見られる。青年期においては、生きる自分をポジティブに捉え、「死」はその対極にあるネガティブなものとして捉える全体的傾向が見られるといえる。

しかし、「死」・「生」・「自己」に共通するイメージを見ると、「苦しい」という項目の平均値には差が見られず、肯定的なイメージの中にも、つらさや苦しさを感じていることといえる。また、共通して「大きい」、「深い」といったイメージを抱き、「軽々しい」というイメージは弱い。このことから、「死」・「生」・「自己」ともに重要なものとして捉えていることがわかる。また、共通して、「未知の」イメージが高く、「疎遠な」というイメージが共通して弱い。いずれも、まだ捉えきれない面や可能性を感じているようであるが、それは自分から遠いものではなく、自分のものとして捉えようとしているといえる。

### 3) 死の不安と「死」・「生」・「自己」のイメージとの関係

全被調査者について、DAS 得点の四分位数を基準に、12 点以上を DAS 高群、11 点・10 点を DAS 中群、9 点以下を低群の 3 群に分けた。DAS 高群 72 名、DAS 中群 69 名、DAS 低群 61 名であった。3 群間において、「死」・「生」・「自己」の SD 法によるイメージに差があるかどうかを調べるため、DAS 得点群を独立変数、「死」・「生」・「自己」の各 SD 法尺度得点を従属変数とする、一要因の分散分析をおこなった。その結果、有意差が見られたものについて Table3-5 に示した。有意差の見られた項目については、多重比較 (Hochberg, Dunnett の C) を行った。

DAS 高群においては、低群に比べ、「死」について「こわい」( $F(2)=15.594, p<.001$ )、「苦しい」( $F(2)=8.484, p<.001$ )、「暗い」( $F(2)=5.239, p<.01$ )、「大きい」( $F(2)=3.894, p<.05$ ) において有意に平均値が高く、「重々しい」( $F(2)=4.253, p<.05$ ) においては高い傾向が、「浅い」( $F(2)=2.472, p<.10$ ) において低い傾向がみられた。

「生」については「優しい」( $F(2)=9.349, p<.001$ )、「楽しい」( $F(2)=6.454, p<.005$ )、「明るい」( $F(2)=7.733, p<.001$ )、「あたたかい」( $F(2)=10.078, p<.001$ )、「大きい」( $F(2)=4.513, p<.05$ )、「おだやかな」( $F(2)=5.129, p<.01$ )、「有限の」( $F(2)=4.933, p<.01$ ) において、DAS 高群が低群より有意に平均値が高く、「浅い」( $F(2)=4.426, p<.05$ )、「疎遠な」( $F(2)=3.241, p<.05$ ) において有意に低かった。

「自己」については「不完全な」( $F(2)=3.979, p<.05$ ) において DAS 高群が低群より有意に平均値が高く、「活動的な」( $F(2)=4.185, p<.05$ ) で高い傾向がみられた。「終わりの」( $F(2)=3.144, p<.05$ ) においては DAS 高群が低群より有意に低かった。

Table3

## SD 法尺度項目（死）の分散分析の結果

		高群	中群	低群	F値	p	下位検定
d6こわい	平均値	4.648	4.159	3.750	15.594	$p < .001$	高>中*, 高>低***
	SD	0.719	0.760	1.099			
d10苦しい	平均値	4.155	3.739	3.550	8.484	$p < .001$	高>中*, 高>低***
	SD	0.936	0.852	1.126			
d12暗い	平均値	4.296	3.826	3.800	5.239	$p < .01$	高>中**, 高>低**
	SD	0.684	1.014	0.988			
d17大きい	平均値	3.620	3.377	3.017	3.894	$p < .05$	高>低*
	SD	1.356	1.250	1.396			
d20浅い	平均値	1.296	1.478	1.633	2.472	$p < .10$	低>高*
	SD	0.571	0.779	0.901			
d29未知の	平均値	4.310	4.348	3.950	4.038	$p < .05$	中>低†
	SD	1.166	0.905	1.048			
d31重々しい	平均値	4.366	3.957	4.000	4.253	$p < .05$	高>中*, 高>低†
	SD	0.722	1.091	0.957			
d39有限の	平均値	2.986	2.971	2.417	2.536	$p < .10$	高, 中>低†
	SD	1.554	1.260	1.266			

(\*\*\* $p < .005$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$ )

Table4

## SD 法尺度項目（生）の分散分析の結果

		高群	中群	低群	F値	p	下位検定
I5優しい	平均値	3.690	3.485	3.050	9.349	$p < .001$	高>低***, 中>低*
	SD	0.855	0.954	1.254			
I9楽しい	平均値	4.268	3.882	3.800	6.454	$p < .005$	高>中*, 高>低**
	SD	0.925	0.764	0.988			
I11明るい	平均値	4.155	3.838	3.617	7.733	$p < .001$	高>低***
	SD	0.822	0.822	1.043			
I13うつくしい	平均値	3.775	3.574	3.350	6.005	$p < .005$	高>低†
	SD	1.111	0.997	1.147			
I15あたたかい	平均値	4.042	4.044	3.567	10.078	$p < .001$	高, 中>低*
	SD	0.869	0.584	1.254			
I17大きい	平均値	3.901	3.721	3.367	4.513	$p < .05$	高>低*
	SD	1.110	1.091	1.327			
I20浅い	平均値	1.803	1.882	2.283	4.426	$p < .05$	低>高**, 低>中*
	SD	0.768	0.820	1.091			
I22おだやかな	平均値	3.662	3.441	3.183	5.129	$p < .01$	高>低*
	SD	1.013	0.835	1.228			
I26疎遠な	平均値	1.493	1.868	1.883	3.241	$p < .05$	中, 低>高*
	SD	0.715	0.862	0.922			
I27愛に満ちた	平均値	3.930	3.838	3.567	5.715	$p < .005$	高>低†
	SD	0.915	0.840	1.125			
I39有限の	平均値	4.423	3.912	3.900	4.933	$p < .01$	高>中, 低*
	SD	0.951	1.156	1.085			

(\*\*\* $p < .005$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$ )

Table5

SD 法尺度項目（自己）の分散分析の結果

		高群	中群	低群	F値	p	下位検定
s8不完全な	平均値	4.282	3.803	3.768	3.979	p<.05	高>低*, 高>中†
	SD	0.959	1.193	1.362			
s23活動的な	平均値	3.648	3.288	3.250	4.185	p<.05	高>中, 低†
	SD	0.864	0.973	1.164			
s38終わりの	平均値	1.690	2.045	2.161	3.144	p<.05	低>高*
	SD	0.919	0.902	1.125			

(\*\*p&lt;.005, \*p&lt;.01, †p&lt;.05, ‡p&lt;.10 )

これらの結果から、DAS 高群は低群に比べ、「死」について、「こわい」、「苦しい」、「暗い」、「大きい」、(「重々しい」)、(「浅くない」)イメージ、一方、「生」について、「優しい」、「楽しい」、「明るい」、「あたたかい」、「大きい」、「おだやかな」、「有限の」、「浅くない」、「疎遠でない」イメージを抱いており、「自己」については、「不完全な」、(「活動的な」)、「終わりでない」イメージを抱いていると言え、低群はその逆のイメージを抱えていると言える。

つまり、DAS で測定される死の不安が高い人は、「生」を明るく楽しく穏やかなポジティブなものとしてイメージされ、しかも限りのある、重大な意味をもつものとして近しく感じていることがうかがえる。「自己」については、先のあるものというイメージを抱いており、「生」と「自己」においては、内観報告から「成長」という反応がみられ、「生」・「自己」ともに成長し変化するものと捉えているようである。しかし、「死」は、そのような、発展可能性のある「自己」の「生」に「有限」性を与える、恐ろしく苦しく、重大なもの、というイメージを持っているようである。すなわち、現実に生きる自己に、自らの存在感の軸足を置いており、その分、自己と生の喪失をもたらす死に対する不安感が強く感じられていると考えられる。その意味で、「死」については、まだ自分のものとして捉えにくいけれども、自分や生に大きく関わるものとして見る観点は持ち始めているとも言える。

一方、DAS で測定される死の不安が低い人は、高い人と比較した場合、「死」について恐ろしいものというイメージは抱いておらず、あまり重大なものであるとは感じていないようである。「生」については、やや現実から離れた視点で、より浅いものとして捉えているようである。「自己」については、何かある程度出来上がってしまってこれ以上の変化を求めているような、自己に対して少し突き放したような観点が読みとれる。すなわち、DAS 低群は、「死」・「生」・「自己」ともに、自分や現実から距離をとったような視点で捉えている態度がうかがえる。このような、「死」・「生」・「自己」を自分のものとして捉えられ難いことと、死の不安の低さが関連していると考えられる。

### 総合考察

本研究では、青年期における、死の不安と「死」・「生」・「自己」のイメージとの関係について検討した。

全体の特徴として、「死」はネガティブで、「生」・「自己」はポジティブな、互いに異なるイメー

ジを抱いているが、「死」・「生」・「自己」に共通して、重大なものというイメージを抱いている。

しかし、DAS で測定される、意識水準の死の不安の高さの違いによって、「死」・「生」・「自己」のイメージが異なる。死の不安の高い人は、いわば、全体的傾向をより明確に強くもっており、「自己」が「生きる」ことの中に充足感や成長可能性を感じており、「死」は、そのようなすばらしい自己の生を奪い、有限性を与えるネガティブなものとしてイメージされ、その点で重大な意味をもっており、死の不安の高さに結びついていると考えられる。一方、死の不安が低い場合、「死」・「生」・「自己」のいずれにおいても、距離を置いて見ているイメージが強く、そのような態度のあり方が、死の不安の低さに関係していることが窺える。

「死」についての直接的なイメージの感情価だけでなく、「生」や「自己」のイメージも、意識上に表れる死の不安の高低に関連しているといえる。生きることや「自己」に対して、自分をその中において向き合うような態度と死の不安の高さとの関連が示唆される。

今回は、意識水準の死の不安と、一連の形容詞のセットといった枠組みによって捉えられる比較的言語性の高いイメージとの関係について検討したが、今後は、無意識水準の死の不安と死のイメージをも含めての検討が必要であると考えられる。

#### 引用文献

- D. I. Templer (1970). The Construction and Validation of a Death Anxiety Scale *The Journal of Psychology*, 82, 165-177.
- Eugene E. Levitt (1966). *The Psychology of Anxiety*: Bobbs-Merrill  
(西川好夫(訳) (1969). 不安の心理学 法政大学出版局)
- Freud, S. (1926). *Hemmung, Symptom und Angst*. Wien: *Internationale Psychoanalytischer Verlag*.  
(井村恒郎(訳) (1970). 制止, 症状, 不安 フロイト著作集 6 自我論・不安本能論 人文書院, pp. 320-376).
- 藤岡喜愛 (1983). イメージ——その全体像を考える—— 日本放送出版協会
- 藤井美和 (2003). 大学生のもつ「死」のイメージ: テキストマイニングによる分析 関西学院大学社会学部紀要, 95, 145-155.
- Hillman, J. (1964). *Suicide and the soul*. London: Hodder and Stoughton.
- 石坂昌子 (2003). 死の意味づけの質的検討と量的検討——死に対する心理の理解 (1) —— 日本心理学会第 67 回大会, 300.
- 石坂昌子 (2004). 死の意味づけの関連要因の検討——死に対する心理の理解 (2) —— 日本心理学会第 68 回大会, 289.
- Jung, C. G. (1971). *Psychological Types*. Princeton University Press.
- 金児暁嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観 人文研究 大阪市立大学文学部紀要, 46, 1-28.
- 笠原嘉 (1983). 不安・ゆううつ・無気力——正常と異常の境目—— 岩波講座精神の科学 3 精神

- の聞危機 岩波書店, pp. 207-260
- 柏木繁男 (1963). S-D 法による意味構造の因子論的研究 心理学研究, 35, 1, 27-31.
- 柏木哲夫 (1999). 死とストレス 現代のエスプリ別冊 現代のストレスの課題と対応 至文堂  
227-237.
- 河合隼雄 (1967). ユング心理学入門 培風館
- 河合隼雄 (1991). イメージの心理学 青土社
- 河合隼雄 (1994). 河合隼雄著作集第13巻 生きることと死ぬこと 岩波書店
- 木村 敏 (1982). 時間と自己 中央公論社
- Marie-Louise von Franz (1984). Traum und Tod: Was uns die Träume Sterbender sagen Kösel München. (氏  
原寛(訳)(1987). 夢と死 死の間際に見る夢の分析 人文書院)
- 李敏子 (1990). 生, 死, 言葉, 身体のイメージ——青年を対象として—— 心理学研究 61, 2, 79  
-86.
- 水島恵一 (1988). イメージの心理学 人間性心理学大系第9巻 大日本図書
- 岡村達也 (1983). 「死に対する態度」の研究——青年と成人との比較—— 東京大学教育学部紀要,  
23, 331-343.
- 渋谷園枝・渋谷昌三 (1991). 「生」と「死」のイメージ調査の基礎的分析 山梨医大紀要, 8, 41-  
52.
- 丹下智香子(2002). 「死」からの連想語の KJ 法による分類——死生観の構造の検討—— 名古屋大  
学紀要, 49, 157-168
- 山中康裕 (2006). 子どもの心と自然——いのちの科学を語る—— 東方出版